

聖書:ルカの福音書9章1~10節

説教:退かれるイエス

はじめに

今日からまたルカの福音書をしばらく見てまいります。8章のところでは、イエスが湖の嵐を鎮め、悪霊を追い出し、病を癒し、そして死んだ娘さえをもよみがえらせる、そのような出来事が書かれて9章に入ります。

今日は二つのことに注目していきます。まず一つ目です。イエスは十二人の使徒に悪霊を制して病気を癒やす力と権威を授けて送り出していく。それは使徒たちを訓練するためだったと当然のように考えるのですが、問題なのはそれはいったいどんな訓練だったのか、です。立派な信仰者に育つため。普通はそう思う。では使徒たちは本当に立派な信仰者になって戻って来たのか。それが一つ目のポイントです。

続いて二つ目のポイント。使徒たちが派遣される時の様子が6節まで書かれていて、その後、使徒たちは具体的にどんなことをしたのか、期待しながら続きを読む。ところが7節になると、話しがいきなり領主ヘロデの話に急に切り替わってしまふ。このことをどう理解したらよいか。これが二つ目のポイントになります。

1 弟子たち

1) 悪霊を制する権威が与えられた

3節以降を読むと、力と権威を授けられた十二人の使徒たちは、イエスから注意事項があつて、杖も袋もパンも金も、そして下着も二枚は持たないよと言われる。つまり手ぶらで旅行に行きなさいと言うのです。いまなら「カードがあるから大丈夫」と言うかもしれませんが、当時はそんなものはない。どうしてイエスはこのような指示をしたのか。

2) 何も持たずに

皆さんは、使徒たちが雨露をしのぎ貧しい姿となって神に祈りながら旅をしていく光景を想像し、やがてすばらしい信仰者になっていったと思つたかもしれない。事實は、まったく正反対です。考えてみてください。十二人はこれまでイエスだけしかできなかった奇蹟を起こす権威と力を与えられたのです。そうしたらどうなるか。うわさを聞きつけた人たちが大勢、病人や悪霊につかれた人を連れて来て押しかけてくる。使徒たちは神の国の福音

を語り、病人に手を置くと直ちに癒やされ、悪霊も出て行く。そういうことが次から次へと起きるのです。そうしたらどうなるか。皆から大変感謝されるわけです。今日は私の家に泊まってください、と言う人もいれば、私の家で食事をしてください。この服を着てください。この靴を履いてください。こんなことが毎日続いてまるでバブルです。だから何も持つていく必要がない。そうしたら弟子たちはどうなったか。このことはまた後で触れることにします。

2 ヘロデの回想

1) このすべての出来事を聞いて

その前に、二つ目のポイントである6節から7節のつながりについて考えます。7節。「さて、領主ヘロデはこのすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。ある人たちは、『ヨハネが死人の中からよみがえったのだ』と言い、別の人たちは、『エリヤが現れたのだ』と言い、さらに別の人たちは、『昔の預言者の一人が生き返ったのだ』と言っていたからである。」

最初にも触れたように、6節から7節はいきなり別の話に替わっていくように見える。しかしよく見ると実はつながりがある。ヒントは、「このすべての出来事を聞いて」です。いったいなんの出来事か。9節に「このよううわさのある人」とあり、「イエスに会ってみたい」とあるので明らかにこれはイエスのことです。人々がうわさをし始めた。イエスは死んだヨハネのよみがえりではないのか。いやいや、竜巻で空にあげられた預言者エリヤが再び来ると先祖たちが言っていたけれど、その言い伝えのとおり、エリヤが来たのではないか。そんなうわさで持ちきりだった。

どうしてイエスのことがそこまでうわさになったのか。十二人の使徒たちが二人一組になり六つのグループに分かれて一斉にイスラエルのあちこちでイエスの名によって奇蹟を行ったので、国中が大騒ぎになった。それがあまりにもすごかったので、ヘロデの耳にも聞こえてきた。6節から7節はぶつ切りと切れているのではなく、実はこんなふうにつながっていたのです。

2) ヨハネは私が首をはねた

ヘロデは「領主」という称号をローマ帝国の皇帝からもらうほどですから、イスラエルの由緒あ

る家柄の出で、日本なら天皇のような地位にある人です。そんな人がいちいち下々の民たちがしているうわさに普通は興味はない。ところが、このときだけ人々のうわさに反応する。そこには二つの理由がある。一つ目は単純なことで、今言ったように使徒たちが起こした騒動がそれだけ大きかったのです、ということです。

二つ目の理由。彼は領主と呼ばれる地位を手に入れるためにいろいろなことをやってきた人だと言われます。ですから洗礼者ヨハネの首を切っても、普通は虫けらをひねり潰すくらいにしか思わないはずで、それなのにこのときヨハネのことを思い出すには、こういう事情があった。マルコの福音書6章20節にこうあります。「それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。」

ところが皆さんご存じのように、このあと当時ヘロデの妻となっていたヘロディアの娘がヨハネの首が欲しいと願ったとき、本当は殺したくなかったけれど、人々の手前、自分のメンツがあつて首を切るように命じてしまった。ヘロデはそのことを忘れようとしたでしょう。けれどもイエスのうわさが聞こえてきたとき、心の暗闇に押し隠していた罪の意識が思い出されてしまったのです。

似たようなことは私たちも経験します。イエスの名前を聞いて、最初から良い印象を持つ方もいるでしょう。しかしかつて私はそうだったのですが、キリスト教とか聖書という名前を聞いただけで何か怖いような気がして、近づきたくないという方もいます。中には、教会に通うようになったの奥さんを見て、ご主人が怒って牧師室に押しかけて来て、「妻に何をするんだ」と言ってすごんだという話も聞いたことがあります。イエスの名前というのは、不思議に私たちの心の奥底の何かに触れずにはいられない。そのような響きがあります。

3 イエス

1) 使徒たちは報告した

このヘロデの話は9節で終わります。10節でまた使徒たちの話しに戻ります。「さて、使徒たちは帰って来て、自分たちがしたことをすべて報告した。」

彼らはイエスにどんな報告をしたのでしょうか。謙遜な態度で報告したのでしょうか。それともそうでなかったのか。ヒントがあります。「自分たちのしたことを」と書いていることに注目してください。自分たちが何をしてきたことを報告した。別に

問題ないと思いますか。でも、彼らが悪霊を制し、病気を癒やすことができたのはだれのおかげだったのか。すべてはイエスが授けてくださったものです。自分たちがもともと持っていたものではない。ところが、人間とは愚かなものでいつの間にか忘れてしまう。人々からすばらしいと称賛され、どうかこれを受け取ってくださいとたくさんのお金をもらう。そうしたら、自分は何か特別な人間で、偉くなった気持ちになっていく。そして帰ってきて報告会を開くと、競い合うようにして自慢を始めてしまいました。

2) ひそかに退かれた

イエスは彼らの報告を聞いてどう思われたでしょう。福音を語り、人々を癒やした、その点では期待に応えてくれたのかもしれませんが。しかし、弟子たちの信仰に関して言えば、高慢になってしまった。何も持たずに旅に出なさいと言ったのに、結果は高慢になって帰ってきた。これはとても訓練とは言えない。こうなることをイエスはご存じなかったのか。もちろんご存じです。では、どうして送り出したのか。何か目的がある。

「私はイエスに何もかも捨てて従ってきました。」彼らはそう思っていた。「私は罪深い人間です」とペテロも最初は純粋にそう思っていた。でもそれはほんの表面に過ぎない。罪は自分が思っている以上に深く底が知れない。いかに自分は高慢なものなのか、ことばでは聞いていても、実際になってみないと自分ではわからないのです。この訓練の目的はそこにあった。自分の本当の姿を見せるために、あえてイエスは送り出していった。

変な言い方ですが、イエスが期待したとおりに使徒たちは十分に高慢になって帰ってきました。それでどうなったか。「イエスはひそかに退かれた」とあります。国中が大騒ぎになるほど注目を集め、今や大スターの階段を上り、人々から希望の星であるかのように期待を寄せられるイエス。ところが、人々が熱心にうわさをすればするほど、イエスはなぜか人々の前から身を引こうとされる。どうしてでしょう。

イエスを信じるものなら誰でも、イエスに従いたい、忠実でありたいと願います。でもどうでしょうか。最初は純粋な思いから出発しても、やがて自分のなかの罪を知らされて、苦しくなることがしばしばあります。イエスを信じたならなにもかも解決

してうまくいく、そんなバラ色の未来を思い描いていたのに、悲しくなることがある。

今日のところを読んで、なぜイエスは弟子たちが高慢になるようにわざわざ送り出していくのか、意地悪に思われたかもしれません。そこには二つの目的があったのだと気がつきます。本当のイエスに出会うために、本当の神に出会うために、その前に私たちは本当の自分に向き合わないといけないのです。神から与えられたものであるのに、いつの間にか自分のものであるかと思ひ込む。いかに高慢なものだったのか。そのことを認めることはとても苦しい。

イエスはどうなのでしょう。イエスも苦しみます。神の子だから何も苦しまない、そう思いますか。イエスはすばらしい権威と力をもって私たちのところに来られました。でもそれがどんなに大変な誘惑であったか、わかるでしょうか。弟子たちの変わり様を見れば一目瞭然です。イエスは、力と権威を持っていたがゆえに、世の誘惑にさらされて苦しんだことを忘れてはいけません。この方が、退いて身を隠されるのも誘惑を感じているからです。苦しんでいるのです。

世の称賛を浴びて高慢になっていく弟子たちは、私たちの本当の姿を映し出す鏡のようなものかもしれません。そんな姿が鏡に映っているのを見たらとても恥ずかしい。しかしその鏡にはもう一人の方が立っている。イエス・キリストが苦しみながら、私たちの味方となっておられることを覚えたいと願います。